

# 令和2年（2020年）チャネルキャットフィッシュ採捕状況

石崎大介・田口貴史・根本守仁

## 1. 目的

近年、県内において特定外来生物チャネルキャットフィッシュの確認数が増加している。拡散を防止して未然に漁業被害を防ぐためには、採捕情報を収集して生息状況を把握する必要がある。

## 2. 方法

県内の漁業協同組合にチャネルキャットフィッシュが採捕された場合には、水産試験場に連絡するように依頼し、漁業者により採捕された全ての個体を回収した。回収した個体は、採捕日、採捕場所、全長、標準体長、体重を記録した。あわせて、水産試験場が実施した調査および滋賀県漁業協同組合連合会（以下、漁連）が実施した駆除事業における採捕個体も同様に記録した。また、一部の漁業者に依頼した漁獲日誌および漁連と水産試験場による採捕データから、延縄の針100本あたりの採捕尾数（CPUE）を求めた。なお、採捕場所は県内の水域を北湖、南湖、瀬田川洗堰（以下、洗堰）上流の瀬田川（瀬田川上流）、洗堰下流の瀬田川（瀬田川下流）に区分した。

## 3. 結果

2020年の本種の採捕尾数は南湖13個体、瀬田川上流54個体、瀬田川下流169個体であった（図1）。北湖での採捕はなかった。南湖での採捕尾数は同程度であったが、瀬田川上流では減少し、瀬田川下流では増加して過年と比較して最も多かった。各水域のCPUEは、瀬田川上流では2019年から減少傾向であるが、瀬田川下流では年々増加しており、過去と比較して最も高かった（図2）。

瀬田川上流では2019年度から漁連が駆除事業を実施しており、特に2019年に発生したこれらの結果を魚類学雑誌（印刷中）で発表した。

幼魚に対して効率的な駆除が実施されたことなどから、採捕尾数やCPUEが減少傾向であるものと考えられる。一方で、瀬田川下流については、CPUEが増加傾向であることから本種の生息量は増加していると推定される。

琵琶湖内の漁業を守るためには洗堰の上流側での対策が重要であるが、洗堰の全開放流に伴い、生息量の多い瀬田川下流からの新たな個体の侵入が指摘されている。本種に対する抜本的な対策を施すためには、瀬田川下流での有効な対策を実施する必要がある。

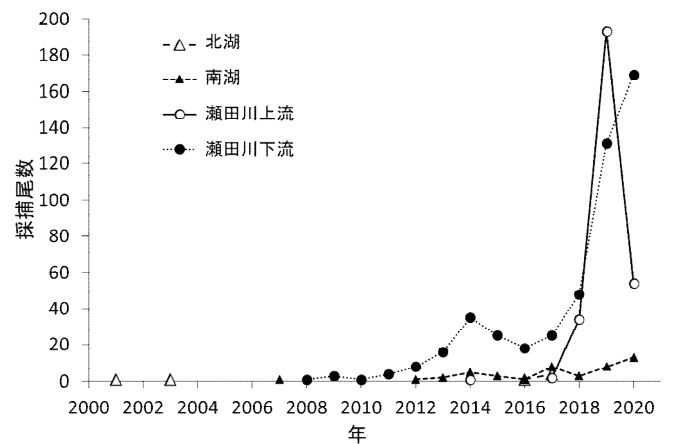


図1. チャネルキャットフィッシュの採捕状況

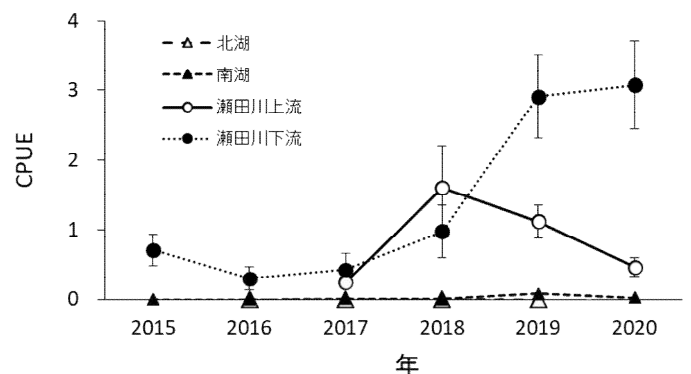


図2. 各水域の延縄によるチャネルキャットフィッシュのCPUE